

## 牧師室から（5月24日）

私が東京神学大学在学中は在日大韓基督教会に属していた。卒業してから千葉県船橋にある在日大韓の無牧の教会で伝道師として1年間在任し、その後派遣されたのが東京の新宿であった。日本キリスト教婦人矯風会のビルの一室を借りて礼拝を守っていて、教会という名は付けられていたが、教会員は一人もいない状態であった。男の年配の先生が10年ほどそこで牧会をしてくださるが、最後の年は体が弱くなり、礼拝を守れなくなったようで何人かの教会員さえも他の教会に移ってしまった。場所だけになってしまったが、そこを受け継いで、女性の伝道者として、韓国から来て新宿で不安定な生活をしている女性たちのために伝道をしてほしいという派遣であった。私が開拓伝道をするということで、たまに応援に来てくださった知人がいたが、その以外は誰も訪れる人はなく、日曜日を一人で迎えることになった。ドアを開けて待っても誰も来ない。本当にこれは神様の御導きだろうか、そのような思いまでして泣きそうな気持ちで、並んでいる空きの椅子をじっと眺めていた。そのとき、突然ある思いがした。私は椅子ごとに座っている人々の姿を想像しながら一人で礼拝をし始めた。「これから礼拝を始めます…、讃美しましょう。祈ります。」そして、聖書を朗読し、説教をした。

一人芝居のような、その礼拝が3か月ほど続き、4人の留学生が訪れた時の感激は今も忘れられない。その後不思議な神様の御導きによって20名以上の方々が共に礼拝に参加し、今まで味わったことがない経験と、にぎやかな日々を過ごすことになった。

礼拝は神様の御前での集いで共同体的な性格をもつ。そして、聖書朗読と御言葉が伝えられ、会衆の神様への信仰告白と讃美がある。また、執り成しの祈りと感謝の応答があり、献身のしるしとしての献げものがある。何よりも聖餐式は主の救済の恵みに身をもって参与し、共に感謝をささげる礼拝の大事な儀式である。つまり、礼拝は、同じところで、神のみ言葉を語る者とそれを聴き、神様に応答する会衆によって成り立つのである。

最初一人でささげたそのときの礼拝が、礼拝といえるものであったかは、今も疑問を感じる。しかし、そのときは、私にとっては最善の形であったし、神様への私の切実な信仰の告白であったと思う。

コロナのことで、礼拝を休止しているこの頃、そのときのことを時々思う。在宅の状態、ホームページを通して、あるいは週報や説教原稿を前にして守る礼拝を礼拝といえるものであるかは、答えに困る。しかし、この非常状態の中で、これが私たちの信仰の精一杯の形であることを、主に祈りながら憐れみを乞う。

主の体である教会で、共に礼拝を守れる日、きっと主は隠れた覆いをはがして、喜びと祝福に満ちた真の礼拝に私たちを導いてくださるのに違いない。その日を待ち望みながら、絶えず主を仰ぎ見る日々でありたい。

（鈴木善姫牧師）